



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)
 郵便番号 154
 世田谷区野沢 3-11-3
 電話 東京 (421) 3614
 振替口座東京 93487 番
 編集兼発行人 浮田信家

会長就任に当って

村上 義一

「遺族会が欲しい」靖国神社で自然に洩れた言葉から六年半が過ぎました。当時は他島の様子の判らないためクエゼリン本島の遺族だけでの発足でした。遺族会ができると、戦争の様子や現地の今日の様子が知りたい。遺骨、遺品を迎えたい。慰霊碑を建てたいと次々に願いが生れました。遺族として当然の祈願でしょう。因として行っていたくださった、何回か請願しましたが、遂に実現しません。致し方なく遺族だけで断行することに決意しました。このことはマーシャル、ギルバート全域の遺族に伝はり、多数の方が本会に入会、協力して下さいました。

この間林前会長以下役員各位の苦心、又会員多くの激励、熱心な献策また会員の浄財の御寄附、特に浮田常任幹事と佐竹幹事が体をはって酷暑、食糧、衛生事情極めて悪いかつての戦地を半歳に亘って踏破するなど涙ぐましいものばかりでした。

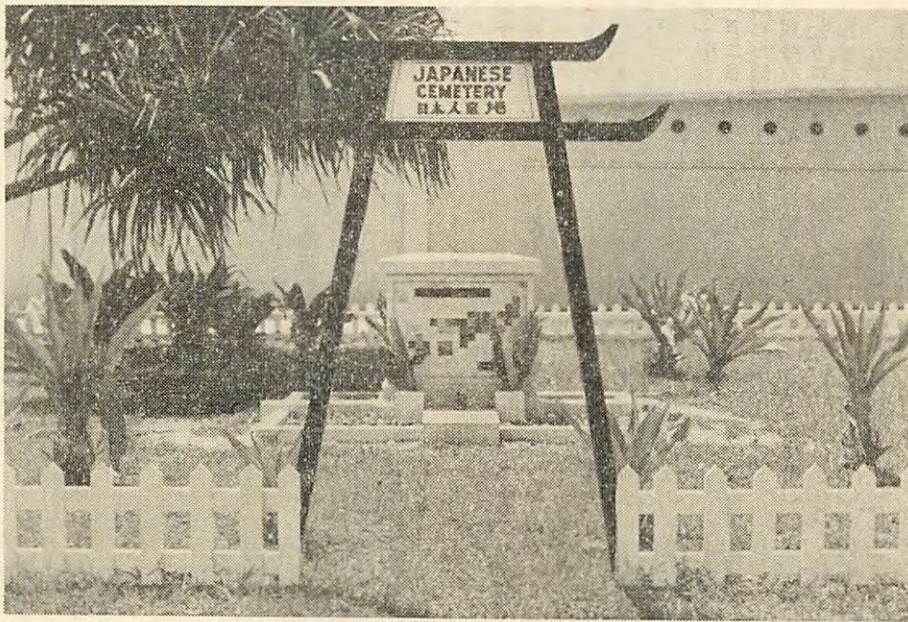
私は会員がこんなにもまとまって、一つの目的に集中し努力する例を他に見たことがありません。遂に当初の念願のすべてをなし遂げ、米国の多大の協力のもとに、米領土内の建碑も完了しました。この間全国各地道府県の寄せられた御協力は、唯一つの公の補助として忘れられません。

厳然として現地に建った美事な慰霊碑の写真を手に、ここまで導かれた林前会長は四月二十八日静かに永眠し、戦死された御令息のもとへ行かれました。

私は本年二月定期総会で、はからずも会長に選任されましたが、このような立派な美しい会をお預りする光栄を感謝すると同時に、故国に殉じた三万五千柱の御功績を偲び、林前会長の後を継ぎ、生ある限り、皆様と共にその霊をお慰めに行きたいと思ひます。

(もと参議院議員、運輸大臣現在日本交通公社会長)

待望の慰霊碑
遂に完成



クエゼリン島内日本人墓地

目次

- 会長就任に当って……村上 義一(1)
- クエゼリン陣中日誌……………成田喜代治(2)
- 嗚呼林前会長……………佐藤 宗丕(3)
- ブラウン島戦史……………浮田 信家(3)
- 中部太平洋の戦況と守備隊の増強……………(3)
- 海上機動第一旅団の進出……………(3)
- マーシャルの戦略的価値……………(4)
- 米軍のマーシャル攻略計画……………(4)
- 18年12月末までのブラウン島の守備隊……………(4)
- 海上機動第一旅団の来着……………(5)
- 米軍の上陸準備砲撃開始……………(5)
- 地誌ブラウン……………(8)
- 今日のブラウン島……………(8)
- ブラウンの遺影と戦地だより……………(9)
- ブラウン島の写真……………(9)
- ブラウン島の霊砂……………(9)
- 玉碎された二戦友を想う……………(9)
- ……………本名 進(10)
- 浮田常任幹事副会長に指名……………(10)
- オーション島……………佐竹 エス(11)
- 本年二月六日の慰霊祭と定期総会・皇居参拝記事……………(12)
- 慰霊碑建設工程報告……………(12)
- アルバム編集と図案の募集……………(12)
- 徳原夫妻に対する感謝の集い……………(12)
- 靖国神社へ本会々員の奉納……………(12)
- 建碑に当り、隠れた功労者……………(13)
- 第五期決算報告と昭和四十四年度予算……………(13)
- 寄附者芳名……………(13)
- 事務局だより……………(16)

マーシャル諸島

クエゼリン陣中日誌

第六十一警備隊司令兼
第六潜水艦基地隊司令

海軍大佐 成田 喜代治記

まえがき

最近になって、昭和十八年の日記を発見した。その前半はクエゼリンで書いたものである。これに前年の分を、手紙などから補足して私のクエゼリン陣中日誌を編さんした。この約七ヶ月の間クエゼリンでは戦闘は行われていないので戦史の傍註になることもあろうかと思つて書き残す次第である。

元第六十一警備隊司令 成田 喜代治

陣中日誌

昭和十七年

十月十五日(木) 待命

十月十六日(金) 予備役、即日充員召集。

十一月五日(木) 第六根拠地隊司令部附。横濱航空隊から大艇

が出発。午後三時頃サイパン島着

友成司令官に挨拶。一泊。

十一月六日(金) サイパン発

トラック島着。鮫島(具重)第四

艦隊司令長官に伺候、参謀長は、

同期の鍋島(俊策)少将。

マーシャル飛行の飛行便を待つ

ため、南洋貿易会社々宅に宿泊。

同宿に一船長が居た。ニューギニア

ア附近で爆撃に遇い、船は沈没し

巡視に御供をした。旗艦は軍艦鹿島である。巡視の後旗艦で長官の招宴があった。

十一月二十八日(土) 佐立技術

大尉が横須賀へ帰った。舟艇修理

場を建設するための下見分、意

見を中央に具申するためであった

十一月三十日(月) 副長交代

して内木少佐は内地に向け出発し

た。中央に出頭して、マーシャル

の現状を報告することになって居

た。

お正月の用意に、餅を掲ぐ白を

作った。一つは木製で、一つはコ

ンクリート製であった。近海で米

国の運送船が沈没し、その積荷の

杉材が沢山浜に打ち上げられて居

たのを使用した。

餅の初搦きは司令の許で行われ

た。

鏡餅にはユヅリ葉がないので、

椰子の花を挿した。

昭和十八年

一月一日(金) 天気好し。

遙拝式。勲章授与式。

司令部に回礼に往く。この日の

昼食は基地隊であった。二ツの隊

を兼任して居たので両隊の士官室

で食事をしたが、基地隊は概ね、

一週一日位にして居た。

一月二日(土) クゲジャガエ

ン島の舟艇修理工場を視察。警備

隊所属の真珠採船や鯨漁船は、こ

この二りに曳き揚げて修理するこ

とが出来た。

晩、演芸会。演芸掛りの寶戸兵

曹は自身役者になった。又島民掛

りとして島民の操縦もうまかった

私の誕生日ということで、士官室

にビールを配った。(私は本当は

一月三日(日) 雨。遙拝式。

午後カヌーでエビゼ島へ往く。

晩演芸会。(常時見張り砲に人

を付けているので、演芸会も半数

宛二回にやるのが例である。)

一月五日(火) 第六潜水艦基

地隊の運動会。飛行場。

一月六日(水) 観兵式打ち合

せ。

水上偵察機が事故を起したので

救助隊を派遣する。

夜間訓練。

一月七日(木) 隊務会報

一月八日(金) 観兵式場に設

標する。

司令部で映画の試写

一月九日(土) 観兵式予行。

中華民國宣戦布告。

この日から謡曲の稽古を昼休み

中にするに決した。先日の新年

会食の際、郵便所の所長嶋田義太

郎氏が謡曲の名手であることを初

めて聞いた。郵便所は戦闘中は私

の指揮下に入るようになって居た

一月十日(日) 砲台の工事に

関し建築部と工廠と立合。

一月十一日(月) 降雨のため

観兵式延期となる。

一月十二日(火) 観兵式。観

閲官は司令官、私は諸兵指揮官で

ある。建築部の軍属も編成されて

いた。

一月十三日(水) 隊内衛生点

検。

一月十四日(木) 愛国百人一首

を二冊浄書し、一冊を士官室に備

え、二冊は形見として長男に送る。

基地隊排球競技

一月十六日(土) ルオット島

病舎の件を司令官に上申する。

マーシャル神社の敷地を検分す

る。

神社の敷地は北に密林を負い、

南に空地のある場所が望ましい。

成るべく島の中央がよい。

椰子林は頂上のみ葉があるが、

下はがら開きで、神社の背景とし

て適当でないので、森の木の密

林を背景とし、森の氣を与える

様、且つ兵舎及び司令部から近く

で、参詣に便利な場所を選んだ。

孤島を準備する兵達の心の寄り所

として、神社を祭りたいとの議が

兵達の間から出て居たのである。

一月十七日(日) 総員に講話

「愛国百人一首について」。

飛行場を拡張するため、抜截作業

を隊の兵がやって居る現地作業を

巡視。

一月十八日(月) 砲台点検。

一月十九日(火) 飛行場開き。

午後、第一砲台で信管時限の実験

を行う。

一月二十日(水) 黎明総員を

警備陣地に就け、急速移動の演習

をする。

一月二十一日(木) 午前降雨

講話「愛国百人一首につき」

一月二十二日(金) 午前、陸

戦教練。

一月二十三日(土) 中攻飛行

場に試着陸。

筑紫出港

一月二十四日(日) 午後相模

乾祥丸入港

分隊点検、勅輪奉誦

講話「兵器の愛護」(つづく)

嗚呼 林茂清 前会長

常任幹事 佐藤 宗 丕

昭和三十八年二月六日、例年の通りクエゼリンの遺族達が靖国神社に参拝のとき、林さんが云い出しました。

「国の命令で戦地に征き、国民の犠牲になって戦死した人々の遺骨を二十年の間異国に野ざらしにしておくのは忍び難い。国がやってくれないのなら我々でやろうじゃないか」。

それからの林さんとその一家はクエゼリンの遺族のため尊い奉仕をお続けになりました。二十年祭を盛大に行つた後、クエゼリン島以外の遺族からも本会に入会希望者が多いと聞き一同じ地域で同じ司令官の下で戦死した者は当然仲間に入って貰う方がよい」と云われ、マーシャル諸島、ギルバート諸島の全域を含むことになりました。

政府の補助もない一民間団体にあのような大きな事業のなしとげられたのは、実に林会長の



御熱意からと云つて過言ではありませぬ。悠々自適の身であり乍ら進んでこの困難な事業に取り組み、募金の苦勞やら現地派遣員の安否の気遣いやらが寿命を短くしたのではないかと相済まなく思います。

現地派遣員が大任を果して帰国した頃から健康勝れず、遂に本年四月二十八日午後一時、戦死された御次男のあとを追うて不帰の客となられました。御葬儀は五月二日世田谷の御邸でしめやかなうちに盛大に行われ、石橋湛山顧問夫人梅子女士が靈前に捧げられた弔辞は創立以来の御功績を称えてあますところなく列席の方々の涙を誘いました。本会会員、陸軍の旧部下達、官公庁関係者その他六百人が別れを惜しみました。

法名誠貫院照善義信忠居士 行年八十八歳 旧陸軍では部内きつての頑固一徹で有名であつたと聞きましたが、本会創立以前から御董陶を頂いた私には慈父のように思われしました。戦後借仕副社長として旧部下やその遺族の不遇な人達の面倒をみた由で、全国から病床に駆けつけた方々の多かつたのもうなづけることでした。前会長の計を御報告し、会員皆様と共に御冥福を祈りたいと思います。

合掌

ブラウン島戦史

常任幹事 浮田 信家 編

昭和十六年十二月太平洋戦争が開始されてから二ヶ年、十八年十月までの、ブラウン島は守備らしい守備はなされず、僅かの海軍部隊が、飛行機の補給基地として利用するに過ぎなかつた。

(四頁梓内記事参照)

▽中部太平洋の戦況と守備隊の増強

昭和十七年暮ガダルカナル島の戦闘以来、戦況次第に我に利なく十八年六月末連合軍がレンドベ島進攻後、中部ソロモン諸島で激戦中のわが陸海軍部隊は十月にはブーゲンビル島およびラバウルに転進した。ニューギニア方面では、陸軍部隊は、命令によつて、ラエサラモアを捨てて、後退中であつた。一方中部太平洋の最前線基地であるギルバート諸島、ナウル島、オーシャン島に対する米國太平洋艦隊の反攻準備も着々と進められていた。

内南洋方面に対する米潜水艦の行動も、日に増し、活発となつてきた。九月中旬に至り米軍機動部隊はギルバート諸島タラウ島、マキン島に対し二百数十機で空襲を加えて来た。

この情勢のもとに九月に入り、第五十二師団の動員があつてトラック島、ボナベ島に派遣することにきめられた。

この間大本営において討策が討議されたが十月八日に陸軍部隊の大量が中部太平洋各島に派遣することに決定されるに至つた。

▽海上機動第一旅団のマーシャル諸島進出

昭和十八年十一月十六日、海上機動第一旅団の編成が下令され、満洲にあつた第三独立守備隊司令部、独立守備歩兵第十一、第十五第十六大隊等を基幹として、その月の三十一日満洲の昂々溪、札蘭屯、白城子において編成を完結した。その編成は次のとおりであつた。

- 海上機動第一旅団 旅団長 西田祥実少将 (三九四二名)
- 本部 参謀 伊藤豊臣少佐 副官 牧野 薫中尉
- 第一大隊 橋田正弘中佐
- 第二大隊 阿蘇太郎吉大佐
- 第三大隊 大隊長 矢野年雄大佐
- 第四大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第五大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第六大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第七大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第八大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第九大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十一大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十二大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十三大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十四大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十五大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十六大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十七大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十八大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第十九大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐
- 第二十大隊 大隊長 阿蘇太郎吉大佐

- 歩兵三ヶ中隊 (一ヶ中隊は二ヶ小隊、機関銃、曲射小隊から成る)
- 迫撃中隊 (軽迫撃砲十二)
- 山砲中隊

(山砲四または山砲二、連射砲二)

○作業小隊 砲隊長 松波春香中尉

○機関砲隊 (八九式機関砲六)

○砲隊長 市川正国中尉 (サイバ

ンで戦死)

○工兵隊 (三ヶ小隊)

○通信隊 隊長 木村一千人大尉

○衛生隊 隊長 木下隆次大尉

○輸送隊 隊長 塚田重一大尉

○隊長 村田光麿中佐 編成は

本部、輸送中隊四、護衛中

隊、材料廠、木造大発二

鐵製小発二

旅団の主力は十二月七日に、駐

屯地を出発して釜山に集結し、マ

ーシャル諸島到着時の配備計画に

基づき、輸送船、但馬丸、日美丸

(T船団第二分団)に乗船、南洋

第二支隊乗船の第二分団(日蘭丸良洋丸)とともに、十二月十四日釜山を出港、途中敵潜水艦の攻撃を受けたが、十二月二十六日無事トラック島に到着した。

南洋第二支隊というのは、関東軍の第四独立守備隊として司令部を満洲国牡丹江に置き、三ヶ大隊をもって治安維持、鉄道守備等に任じていたが、昭和十八年十一月二十四日鉄嶺で編成を完結し、結局は昭和十九年一月三日カロリン諸島東端のクサイ島に上陸した部隊である。本隊は十二月三十日第二分団と別れてトラックを出港、一月四日

ブラウン環礁に上陸した。

機動第二大隊(第七中隊、工兵隊の二ヶ小隊、通信隊の一部配属)は、さらにクエゼリン、ウオッペ、マロエラップに分派された。

前記の輸送隊、だけはフィリピン、のイロイロ(バナイ島)に駐留中の独立工兵第二聯隊を改編して編成されたもので昭和十九年一月二十九日旅団に偏入されたのであるが、マーシャル諸島には二月一日から米軍の進攻がはじまったため、ついに本部に合流ができず、その後ベラオに進駐した。

ブラウン島には、この外に海軍の第六十八警備隊の分遣隊、第二十二航空戦隊の基地員、設営隊関係員等が昭和十九年一月下旬には三五八名の兵力であった(戦史叢書による)

▽マーシャル諸島の戦略的価値

ここでわれわれは、太平洋戦争中、マーシャル諸島はどんな価値があったか反省してみたい。

マーシャル諸島の各島は、どの島も猫の額のように小さい。そして平低である。しかも地下水が浅いから、防備施設の構築はきわめて困難であるから、これらの条件は、諸島を守る上には致命的な欠陥なのである。

したがってマーシャル諸島の戦争のときの価値については前から多くの異論があった。しかしこれらの島に有力な地上兵力を配備して、強固な反撃の拠点とし、優勢な基地航空兵力を配置して、艦隊の戦力と相まって、積極的な戦争をやる場合は、むしろ攻めてくる敵の艦隊に対して、

優位を占めることとなり、地形の欠陥などは補ってなお余りあるとも考えられていた。

事実開戦当初マーシャル諸島は中部太平洋方面の前進根拠地として、初期の進攻作戦に参加した部隊の基地となり、その後も長い期間、航空哨戒や潜水艦部隊の基地となり、またハワイ、ミッドウェイ偵察、奇襲攻撃の基地でもあった。

その上マーシャル諸島は、ウェーキ島やギルバード諸島方面に対する中継補給基地としての大切な役割も果たしていた。

こんな理由からマーシャル諸島には沢山の航空基地が建設されたが、地上の防備施設は地形上の制約もあってなかなかすすまず、ほとんどもが、地上に暴露したまま構築された。

しかし米軍のソロモン諸島方面における反撃や、マキン、タラワなどの欠陥からみて、海空からの支援のない離島の強度が、思ったより貧弱なことがわかり、その結果マーシャル諸島方面の地上防備の強化が早急に必要となったことが叫ばれ出した。

だが船腹の不足や、ギルバート諸島の喪失によって、米潜水艦や飛行機の行動が活発化したため、鋼材、セメントなど資材の輸送が困難となり、昭和十九年二月初めまでは、飛行場以外満足な防備施設はほとんど構築することができず、大部分がたこつば(個人用の掩体壕)程度のものであった。

▽米軍のマーシャル攻略計画

この頃米軍はマーシャル諸島に

対し、どのような準備を進めていたかさぐつて見よう。以下は米国海兵隊戦史から抜粋したものである。

目標の決定

マーシャル諸島は、米軍の内南洋諸島における第一目標であったから、攻略計画は早くから作られる。

「昭和十八年十二月末までのブラウン島の守備隊」

ブラウン島の守備隊

ブラウン島は、戦後原爆や水爆の実験で、一時有名となったマーシャル諸島のビキニ島の西方約一八〇哩、およそ東京と京都位の距離にある環礁の一つである。

この環礁は広くもあるし、深さも適当なので、艦隊の泊地としても良い条件を具えていたが委任統治領であったから、軍事的には何一つ設備のなかったところである。

太平洋戦争がはじまると、ここは航空基地にも良し、艦隊の待機位置として利用価値があるため、昭和十七年十一月はじめて、海軍第四施設部の手で、飛行場が建設され、翌十八年三月

ていた。統合幕僚長会議は昭和十八年七月二十日太平洋艦隊司令長官ニミッツ大将对し、翌十九年一月二日にマーシャル諸島を占領するよう準備を命じた。

ニミッツ司令官は、暫定計画を八月二十日まで作成したが、中部太平洋大進撃作戦の基地として

には、中型陸上攻撃機が使用できる滑走路一三〇〇米が完成した。同島の警備は、昭和十八年一月から、クエゼリンの第六十一警備隊(クエゼリン)とブラウンの間は三百三十哩)から派遣された小数の監視哨によって始められたが、十月に小蘭正則兵曹長以下六十一名の分遣隊が到着し、エンチャビ島とその飛行場の警備を主任務とした。

主要兵器は十二口径二門と、十三ミリ機銃が二基だけであった。飛行場は補給基地、中継基地として利用され、整備兵五〇名が駐屯していた。

関係から、その後の折衝によってウエーキ島とクサイ島の攻略を削除してもらった。

ギルバートの占領後二個師団を収容するには輸送船が足りなかつたので、マーシャル諸島上陸を三〇日間で準備することは不可能であった。

そのため攻略開始日は一月二日から十八日に延期され、さらに三十一日に延期された。

マーシャル諸島の東部即ちラタック列島を素通りして、クエゼリン島を直接占領しようとする考へ方は、従来反対意見が多かつた。というのは、原則として爆撃機用の完成滑走路のある島即ちウオッピ島かマロエラップ環礁のタロアを占領する必要があるということであつた。

その頃クエゼリン島には爆撃機用として十分な飛行場がなく、また迅速にこれを構築する機会がないと一般に信じられていた。

ところが十二月五日機動部隊がマーシャル空襲の際撮った写真によつて、クエゼリン島の南側に爆撃機用滑走路がほぼ完成しているのを判読した。

その結果、太平洋艦隊司令部の最終計画では、まづ無防備のマジュロ島を占領し、次にクエゼリン島を攻撃することとし、またクエゼリン島の日本軍が予想より頑強でなければ、地上部隊の一部はブラウン島に使用すると決定された。これに従つて米軍部隊は、クエゼリン環礁中ロット島を攻撃する北部部隊、クエゼリン本島を攻撃する南部部隊、および予備隊、マジエロ島攻撃部隊はクエゼリン攻撃中は待機し、クエゼリン投入の必要がなければ、ブラウン攻略もすることになつていた。

▽ブラウン島の警備

ここで、もう一度4頁の枠内記事を読み返して、次を御覧いただきたい。

▽海上機動第一旅団の来着

昭和十九年一月四日海上機動第一旅団が満州からこの島に進駐して来た。十二月十四日敵寒の釜山を出港し、僅か二十日前後で酷暑のマーシャル諸島に達した、同隊の苦勞には察してもなお余りあるものがあつたに相違ない。

早速配備が行われ、一月月上旬末までにブラウン島、メリレン島、エンチャビの三島に分駐された。

旅団長西田祥実少将はメリレン島に駐屯。横須賀第一海兵団で編成した海軍の第六十八警備隊(司令青山英夫海軍大佐以下六、二九名)が、昭和十九年一月二十四日横須賀を出発して、本島に向つていた。以上のほか、艦艇の乗組員山九会社の労務者が、クエゼリン島に行く途中寄港上陸中であり、飛行場と防備施設の作業に従事中の施設部所属のものもいた。

旅団長は、トラック島でマーシャル方面の防衛に関する第四艦隊の命令を受領し、これに基づいて一月二十八日旅団の守備要領を策定し各部隊に示達した。その要点は概ね次のとおりであつた。

- 一 旅団は各守備島を絶対に確保し、泊地および海軍諸施設を擁護する。旅団直轄部隊は状況により、ブラウン環礁だけでなくマーシャル方面の他の島に対する出動を準備する。
- 二 各守備隊は、おおむね一ヶ月で野戦陣地を完成し、その後工事の増強、一部永久施設の増設に努める。
- 三 陣地編制および構築に当たっては、四周に対して防禦できる

よう堅固に陣地を構築するが、配備の重点は外海に指向する。

- 四 敵の砲撃に對して損害を減少するため、努めて掩蓋式、洞窟式待避壕を作り、重火器の陣地は同一任務のため四個以上、個人の掩体は七米以上離すこと
- 五 防禦方針は、敵を水際に撃滅してその上陸企図を破砕するにある。また敵を側背から攻撃できるよう準備する。
- 六 昼間は陣地を利用してなるべく損害の減少に努め、夜間攻撃により敵を圧倒する。

ブラウン島の兵力配備は、ほぼ次表のとおりであつた。

メリレン島の部隊

旅団長直轄(西田祥実少将)

- 旅団司令部
- 第一大隊第三中隊
- 第三大隊第九中隊
- 機関砲隊(二ヶ小隊欠)
- 戦車隊(二ヶ小隊欠)
- 工兵隊(二部欠)
- 通信隊(二部欠)
- 衛生隊(三分の一欠)

守備隊、第二中隊長松下勲大尉

- 第一大隊第二中隊
- 追撃一ヶ小隊
- 砲兵一ヶ分隊
- 第三大隊砲兵一ヶ分隊
- 工兵一ヶ小隊(半部欠)
- その他

旅団軍属

- 海軍航空部隊
- 海軍施設隊員
- 主要装備
- 重擲彈筒
- 重機
- 輕機

海軍警備隊分遣隊

- 二十耗機関砲 一
- 輕戰車 三
- 八十一耗迫撃砲 一〇
- 二十耗自動砲 三
- 四一式山砲 二
- ブラウン島 守備隊
- (指)第一大隊長、橋田正弘中佐
- 隊・砲兵一ヶ分隊
- 第一大隊(第二中隊・第三中隊)
- 迫一ヶ小隊欠
- 旅団機関砲隊一ヶ小隊
- 工兵隊一ヶ小隊
- 通信隊の一部
- 軍属
- 海軍監視哨要員
- 主要装備
- 擲彈筒
- 輕機
- 重機
- 八十一耗迫撃砲 一一
- 五十耗迫撃砲 一一
- 自動砲 一
- 火焰放射機 二
- 三十七耗速射砲 二
- 山砲 二
- 二十耗機関砲 二
- 海軍の十二種砲 二
- 二十耗二連裝機銃 二
- 輕戰車 三

- 旅団機関砲隊一ヶ小隊
- 工兵隊二ヶ分隊
- 通信隊の一部
- 軍属
- 海軍監視哨要員
- 主要装備
- 擲彈筒
- 輕機
- 重機
- 八十一耗迫撃砲 一一
- 五十耗迫撃砲 一一
- 自動砲 一
- 火焰放射機 二
- 三十七耗速射砲 二
- 山砲 二
- 二十耗機関砲 二
- 海軍の十二種砲 二
- 二十耗二連裝機銃 二
- 輕戰車 三

海軍航空部隊

海軍設置隊員

主要装備

旅団長はブラウン島に上陸するや、同島がほとんど防備がないことを知って、すぐ島内を偵察し、各島に守備兵を派遣した。そして米軍の攻撃が主として礁湖内からされるのと判断し、拠点は主として礁湖面に準備するよう指令した。一月二十二日に「離島防禦に関する觀察」という参考資料を配った。その中で米軍の来攻について「敵の上陸兵力は、最少限歩兵三ヶ師団と、戦車一ヶ師団からなりこれに六隻の空母、四隻の戦艦、四隻の重巡、四〇隻の駆逐艦および五〇トン級の輸送艦六〇隻」と、すでに兵力的にも、われに比べて圧倒的な進攻兵力を予想していた。

においては、皇軍の伝統と旅団の名譽のため捕虜となることを禁ずる。戦闘に堪えない傷病兵は自決する」と示した。

旅団はブラウン島に到着してから約十日後、持久戦に必要な作戦資材や、糧食の補給自給、態勢の準備、人事等の連絡のため、副官牧野薫大尉を内地に派遣したが、同大尉が内地で連絡を終わりとラックに帰着したとき、すでにクエゼリンは玉砕し、ブラウンにも米軍が上陸していた。

又エンチャビ島には多数のセメント、トタン、木材があり、旅団の到着後にも三隻の船が、築城材料をエンチャビ島に揚陸し、各島に分配する予定であつたが、その前に米軍の上陸を受けた。

守備部隊は築城に多大の努力を払つたが、食糧の欠乏と氣候の不順、時間の不足のため完成に至らなかつた。

▽米軍の上陸準備砲撃始まる

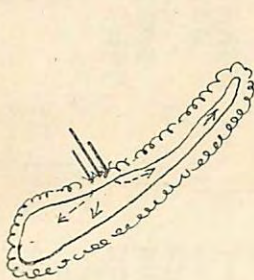
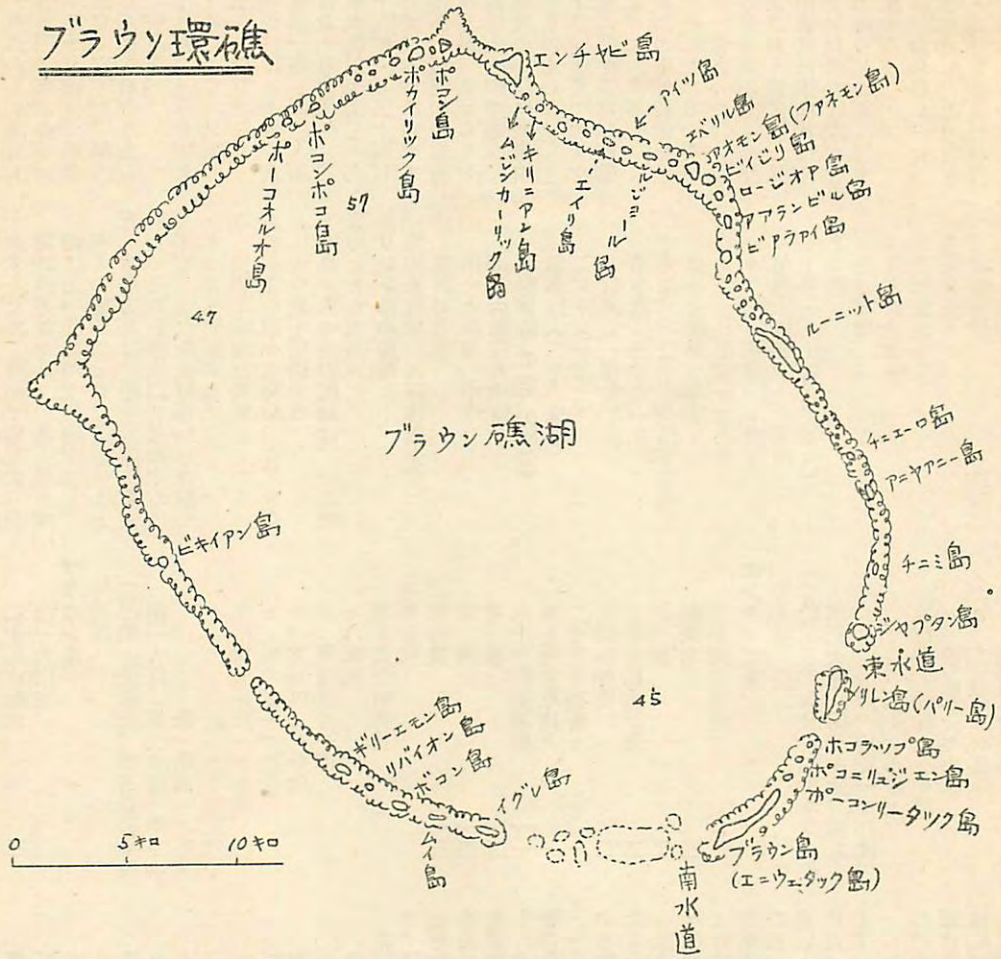
昭和十九年一月三十一日ブラウン環礁に対する米海軍艦載機による初空襲に見舞われた。

その日ブラウンには、前日テニアン島から到着した第七五三海軍航空隊の陸上攻撃機七機を合わせて十数機の陸攻があり、三十日朝から始まった米機動部隊のマーシャル方面空襲に對し索敵攻撃に當ると同時にブラウン米襲に備えていた。

米軍艦載機は、午前四時頃から戦爆連合をもつて来襲し、空中退避中の方が陸攻四機は行方不明となり、他は索敵機三機を含め、全機が地上で大破炎上した。

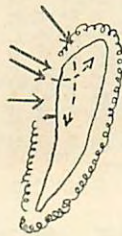
米軍艦載機は、午前四時頃から戦爆連合をもつて来襲し、空中退避中の方が陸攻四機は行方不明となり、他は索敵機三機を含め、全機が地上で大破炎上した。

ブラウン環礁



ブラウン島
(エ=ウエタック島)

III 図



メリレン島

II 図



エンチャビ島

I 図

米機動部隊は、断続的な攻撃を続け、二月中旬ごろには、ブラウン環礁各島の防禦施設は、コンラート地下壕、戦闘指揮所等を除き、地上にあるものは、ほとんど破壊された。

二月十八日からは、高速空母と護衛空母による猛烈な準備攻撃が始まった。艦砲もまた少なくとも二、八〇〇トンの弾丸をエンチャビ島に打ち込んだ。

米軍の攻撃部隊は二月十六日の午後、クエゼリンを出撃した。ブラウン上陸部隊は約八〇〇〇名の海兵隊と陸軍であった。

輸送船九隻に分乗した二ヶ聯隊の外に舟艇塔載船には戦車隊を、輸送駆逐艦二隻には偵察部隊を乗せていた。この外に戦車揚陸船九隻、歩兵揚陸艇二隻、哨戒艇二隻も加えられた。

これを支援する海上兵力は戦艦三隻、重巡三軍からなり、駆逐艦二十五隻がその警戒隊として付属した。

▽エンチャビ島の戦闘。

連日の空襲にもかかわらず、これまでの人員の損害は、四五十名に止まっていた。それも直撃や砲弾の破片によるものは少なく、倒木や構築物の倒壊による間接的な原因によるものが多かった。地上に山積していた兵器、弾薬は、ほとんど空襲でやられ、地上には目標になるものはなかった。

米軍は二月十八日午前四時から南水道と東水道の掃海を行ない六

時十五分ごろ南水道から、礁湖の中に進入した。

輸送船団は九時三十分ごろ指定錨地に到着し、偵察隊をルジョール島、アイツ島、エイリ島に上陸させ、日没前に、ルジョール、アイツ島に山砲と十榴をそれぞれ十二門づつを揚陸した。

米軍は日本軍の退路を断つためエンチャビ島の西側のポコン島も占領し、エンチャビ島海兵の偵察や浮標の設置をはじめた。

十八日夜は一晩中、艦砲、飛行機、砲兵隊からの砲火がエンチャビ島を吹きまくった。しかし米軍の艦砲は、あまりに近距離から射つためか、弾道が低伸しているため、低い平らな島を通り越して、水面に水しぶきをあげることが多かった。日本軍守備部隊はこの砲撃の合間をぬって、夜の中に、内海側に移動し、陣地の補修増強を強行した。守備部隊は計画に従い、防禦配備についた。この日の砲撃により、人員に三分の一以上の損害があったようであるが、全員の士気はなお盛んであった。

翌二月十九日は強いスコールで夜が明けたが、間もなく止んだ。午前三時米軍の一斉射撃が始まり五時すぎ、航空部隊による爆撃に代り、やがて上陸用舟艇が近寄った。日本軍守備部隊の攻撃武器の大部は、砲撃で破壊され、敵上陸時には、わずかに残った砲と擲弾筒で激しく舟艇射撃を実施した。間もなく米海兵隊三、五〇〇名が上陸を終った。

日本軍は島の西半部の滑走路附近で、頑強に抵抗したが、米軍が

上陸してから約一時間後、突撃ラッパと共に全員突撃を敢行した。

七時三十分米軍戦車数台は全島を蹂躪し、守備部隊はもはや、組織的戦闘力を失った。その後は、米軍戦線に潜入したり、隠蔽された横穴や銃眼のある壕から、個々の抵抗をつづけるにすぎなかった。

二月十九日午後一時四十分、米軍はエンチャビ島占領を宣言した。

▽エニウエトク(ブラウン)島の戦闘(Ⅲ図)

米軍は最初メリレン島とエニウエトク島には日本軍守備隊はいないか、またはごく少数の兵力が配備されていると判断したようである。

米軍の情報将校がエンチャビ島で発見した日本軍の書類によって初めて両島がそれぞれ一三四七名と八〇八名の守備隊によつて、防備されていることを知り、急いで両島同時上陸の計画を改め、利用できる全兵力で、逐次攻撃することに計画を変更した。

エニウエトク島は長さ四二〇〇米、幅は最も広い西端で二二〇〇米東北に行くに従つて細くなつてい

る全島珊瑚礁の島であった。外海側には珊瑚礁(リーフ)がある上に、外海から寄せる波が荒いので、上陸には適しない。

艦砲射撃や航空部隊による攻撃は、米軍が日本守備隊の配備を察知してから激しくなつた。守備隊は最初重機関銃や、軽機関銃で応戦して、却つて効果がなればかりでなく、却つて配備を暴露するのを、守備隊長が配じて、対空射撃を中止した。

集積した弾薬は、米軍の爆撃によつて、歩けない程誘爆し、食糧や兵器も大半が爆砕され、また人員の損害も二〇〇名に達した。

米軍上陸部隊の第一波は準備砲撃の後、二月二十日午前六時十八分海岸に着岸し、後続部隊も続いて上陸した。

日本軍は海岸でわずかな抵抗をしただけであったが、米軍上陸部隊の行動は緩慢で海浜が非常に混乱した。九時三十分頃、ようやく島を縦断する道路の線を突破して南方に進出したが、日本軍は至るところに拠点と占領し、迫撃砲や小火器で米軍の進撃を悩ました。

米軍はさらに予備隊を上陸させ南に向つて攻撃中の部隊の外海側に投入したので、十二時五十分、ついに日本軍の陣地は、突破された。米軍は夜間も攻勢を続行した。

二月二十一日早朝、守備隊約四十名は、海兵大隊の戦闘指揮所に突撃を敢行したが、撃退された。この戦闘で海兵隊は将校外一〇名が戦死したと米戦史に記録があつた。

南部地区の日本軍陣地が全滅したのは二月二十二日であった。一方この間北に向つた米軍は、次第に日本軍を島の北端に圧迫した。二月二十一日午後、日本守備隊五十名は、米軍に対して最後の突撃を敢行した。米軍はこの攻撃を撃退したものの、その行動は緩慢で、二十二日によりやく北部地区の掃討を完了したのであつた。

二十二日午後一時三十分米軍はエニウエトク島の占領を宣言した。

エニウエトク島で、米軍はメリレン島の防禦計画資料を入手した。

米軍の準備砲撃によつて、メリレン島の茂っていた椰子林は焼けたが、島は廃墟と化した。

海兵隊は二月二十一日、東水道の北側のジャブタン島に砲兵を揚げ、午後六時頃からメリレン島を射撃した。艦砲と航空部隊の爆撃は、三日間に亘り、昼夜連続してメリレン島を攻撃し、艦砲は近距離にすぎ弾道が低伸していることと、日本軍が地下施設を利用していたため十分の効果を収めることはできなかった。

上陸は二十三日午前六時八分頃から開始されたが、日本軍は地下に構築した蜘蛛の巣状の堅固な陣地によつて、勇敢に戦った。

攻略部隊は、戦車を第一線としその直後に、爆破隊と火焰放射器隊を続行させて、日本軍陣地を爆破し、また焼き払つた。

日本軍は連射砲と地雷をもつて対抗したが、上陸地点から北上した米軍戦車と徒歩部隊は十時三十分北端に達し、又南下した部隊も午後四時三十分までには、南端に達し、かくてメリレン島は占領されたのである。

二月二十三日米軍は、メリレン島の占領を宣言したが、その後地下壕の日本軍を掃討するために、米軍はエニウエトク島の占領で払った損害の約二倍の死傷者を出したといふ。

大本営は二月二十五日にクエゼリン島とルオット島の王碑を発表したが、ブラウン島については、国内に与える土気上の影響を心配してか、とうとう未発表に終つた

地誌 ブラウン

事務局編

ブラウン環礁 (Brown Atoll)

日本が委任統治をしてゐる頃は、ブラウン島と呼んでたこの環礁は、米国の信託統治にうつつてから、Eniwetok 環礁と呼んでゐる。いづれも誤りではないが、本会ではやはり本会につな

がりの多いブラウン島で通したいと思う海上保安庁の海図番号二二二の分図は、又米海図では六〇三二と六〇九〇に掲載されている。ほど円形の環礁で

北西隅のボコン島から、南東隅のブラウン島まで三九キロ、約三十個の島から成っている。島は外周の東側礁脈上に多く

やゝ大きいのは北方からエンチャビ島、アオモン島、ルーニット島、ジェベター

ン島、メリレン島およびブラウン島などである。ブラウン島の西部に高さ約五米

の小丘があるほか、いづれも二米から四米という低さで、小さい。ヤシや雑草が茂っている。特に北

のエンチャビ島と南のブラウン島にはヤシの木が多い。

東方約三〇六キロのピキニ島と共に近年特殊の実験の結果、危険区域と指定され、この環礁の島内全水域は、すべての船舶、航空機ならびに人類に危険を及ぼすものとされている。本会現地派遣員も

ピキニ島のすぐ東のロンゴラップ島までは訪れたが、この両島原爆病の危険があつて入れなかつた。

▽各島の近況
エンチャビ島は環礁の北端にあつて三角形で、各辺はいづれも長さ約一・七キロ、高塔が二基見える。

アオモン島はエンチャビ島の南東方約八・三キロにあつて最大幅約七四〇メートル、南端に塔が一基ある。アオモン島の南端と隣島

ピイジリ島とを結ぶ堤道がある。ルーニット島はアオモン島の南南東方約七・四キロにあつて長さ約二・三キロ、幅は非常に狭い。

島の北西端附近には塔が見える。ジャベターン島はルーニット島の南南東方約一二キロにあつて、径約六四〇メートルの島である。

メリレン島はジェベターン島の南方にあつて、南北の長さ約二・四キロ、北部の中五〇〇米である。島の中央近くには、高さ約二四米のタンク様のものがある。ジェベターン島の間は東水道である。

ブラウン島は環礁の南東端に位し、この環礁中では最大の島である。北東の端から南西の端までの長さは約四・二キロである。そして北東部は狭いが、南西部では約六四〇米に広がつてゐる。島の南部の礁湖側に高さ約三七メートルの塔があり、島の北東部には高さ約二十メートルのタンクと高さ三十メートルの信号塔がある。

イグレム島はブラウン島とは南水道を距て西方約九・七キロにある高さ三十メートルの塔がある。

▽礁湖
ブラウン環礁内には多数の大形の船の錨地があり、水深は二〇―五五メートルである。

▽水上飛行場
メリレン島とブラウン本島との間の環礁内に水上飛行場の設備があつて環留浮標が設けられている

▽繫船浮標
礁湖の内には小舟や小形船用の繫船浮標が多数あり、電話浮標も数個ある。タンカー専用のもものはメリレン島とブラウン本島の近くにある。繫船浮標ではないが、環礁内にはレーザー反射器のついた浮標も散見される。

▽気象
風 一年を通じて北東または、東北東の風が多く、西風はきわめてまれである。風速も弱く平均二五メートル秒である。

気温 マーシャル諸島でも、この島は北部に属し年平均気温は、二六・八度である。最も高いのは五月六月頃で平均二八・七度、最も低いのは一月二月頃で平均二六・七度である。スコール、六月七月に最も多いマーシャル諸島の南部

に較べると極く少い。

▽設備
戦禍によつて棧橋その他破壊され、戦後の様子ははっきりしないが、昭和三十年当時はブラウン本島では荷物のしけであげたエンチャビ、メリレン、ブラウン本島には小さな棧橋しかない。はしけも五〇トン、一〇〇トン二五〇トンのものがあつたに過ぎない。

▽住民
昭和二十六年島民は全部で七十八名であつた。マーシャル諸島の島と同じく一般に従順なクリスト教徒である。

衛生思想もひくく、一般に不潔を甘んじてゐるが、その割には衛生状態は良い。

▽物産
魚類は豊富で、ジャベターン島のえびは味が良い。豚、鶏はやはりマーシャル諸島と同じく少量あるが、野菜はまったくない。

ブラウン本島にある井戸は水量はあるが水質はよくない。

今日のブラウン島
八月十一日(金) (昭和42年)

昨夕の約束でリタの山村さん宅に寄りつしよに、バスでマジョロ病院にゆき、リハビリテーション、センター(身体障害者更生訓練センター)を訪れた。ここにアンジャー(Mr. Anju)といつて、

数年前ブラウン島で働いてたことがあると聞いたからである。五十米先きは海岸で、太平洋の怒濤がいつも岸を見える。視界のよい日はアルノ環礁が見える。そんな病室で彼は浴あてのない体を毎日治療をうけている。来意をつけ話

をきいた。

忘れかけた日本語と、戦後おぼえた英語の片言を混せてゆるゆる話してくれた。六十に近い年輩である。

「私は戦争中ウオッゼに任んでいたので、最後まで日本軍に協力しました。北砲台長の横沢少尉はよく世話をして下さつたので今だに忘れません」など話したあと。

「戦後米軍の使役に従事しました一九六二年六月(昭和三十七年)ブラウン島に派遣され、日本軍の建てたらしく建物取こわし作業中アーチ型の鉄骨が倒れかかり、逃げようと走つた最中腰推をうたれ神経が切断しました。早速ハワイの病院に運ばれ、手当を受けましたが、経過は思うようにゆかずマジョロに病院が出来たので帰つて来ました」

アンジャーさんの話を総合するとエンチャビ島は今日何にも使つていない。ジャブタン島はいま観測所として使つてゐる。メリレン島には倉庫程度のものがありブラウン本島には三〇〇〇人位の米軍並びに島民が住んでゐる。クエゼリン環礁と同じように離島に観測所を置き又礁湖にはところどころルーダーつきの浮標があり、ブラウン本島は近代化した施設をそめてミサイルの発射場も完備して、米本土、クエゼリン環礁、ブラウン環礁の三地点の施設によつて、米本土からうつミサイルをブラウン環礁内に誘導して落下させる。こんな実験がくりかえされてゐるのが今日ではないかと思ひました。カトリックの神父が毎週飛行便でブラウンに布教にゆくとも聞いた。

南東方のブラウン水道と望む

ブラウン本島

メリレン島

ジェベターン島

ブラウンの遺影と戦地だより

本誌第十号をブラウン島の特集とするため、本年二月同島での戦死者遺族に資料をお願いした。沢山の御返事をいただいたが、

「南方に行きましては一度も何もありません」皆川タツ八十四才
 「私共では、その当時現地あてで送付しました手紙その他の小包類もただ理由もなく返却されて来るのみで、勿論現地からも何の連絡にも接して何もなく、誠に残念でございます。東京、荒木しげ」同じような内容でした。
 ただ一つ東京の岡本利代子様から御令息喜美郎様からのお便り二通お送り下さいました。

兵長 塚本利郎 (静岡県)



伍長 伊東征夫 (青森県)



軍曹 岡本喜美郎 (東京)



伍長 大平専太郎 (青森県)



一通はハルビンの第七十三軍事郵便所気付、満州第三七九部隊、「取急ぎ御一報申し上げます。お母様には、相変らず御元氣にて、御活躍の事と拝察致し居ります。本日御母様よりの十六日附入手致し、御母様の御喜びの様子目に見ゆる如きです。本日は私も来月面接の機会を目前に見乍ら、突然命により他隊に転属を命ぜられましたので、折角御母様が喜び居られましたことも、残念乍ら無期延朝となつてしまい残念と思ひます。これも命により致し方なき事故、どうぞ御心落しなく又の機会を御期待せられたし。兎に角、書簡は新所属隊決定後私が御便りするま

で暫く御出しにならぬよう御願ひ致します。私は元氣で行きますから何卒御心配なきよう。取急ぎ御一報のみ。詳しくは又家に訪れる者が御話しする事となりませう。暫く御便りも遠くならないと思ひますが呉々も御心配なき様不一
 十一月二十四日 喜美郎
 御母様

他の一通はハガキで「其の後御母様にも御変りもなき事と拝察致して居ります。私も前便以来何ら変わった事もなく、元氣にて軍務に過して居ります故何卒御安心下さい。さて留守宅送金のことですが、私も十二月軍曹に任官致しましたので本年三月分より二十五円也御手許に届く様手続き致しました故左様御承知下さい。又年末賞与も十五円也届いたでしょうか。送金が順調に行かぬようでしたら御一報願ひます。ハルビンの魚沼様の方へは母様より宜敷しく申して下さい。では又何れの機会にして失礼致します。はがきの住所は

横須賀郵便局気付ウ五〇
 駆第三一三八部隊岡本喜美郎
 ウ五〇はクエゼリン第六十一警備隊、駆第三一三八部隊は海上機動第一旅団の中の部隊であるので、

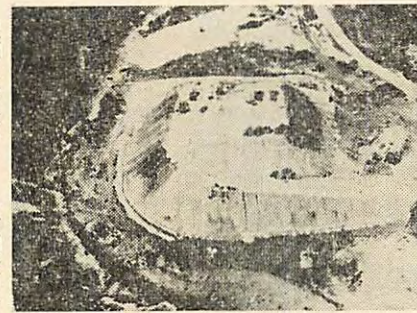
ブラウン島に向う船中認められ、船に托して、送られたものでは無いでしょうか。現地に到着後は余裕もなく、このはがきが、ブラウン部隊から最後のものではないでしょうか。

ブラウン島の写真

佐竹エヌ

一昨年八月二十三日マージナル

諸島のウトロック島に上陸、戦跡調査のあと、その晩は同島に泊りました。ホテルなど全くありませんし、酋長の家でも、客をとめる部屋など勿論ありません。砂地にゴザを敷き、蚊張の吊手パンの木に結んでその中に寝ました。



「そのほど御希望なら、お返し下さらないでよいから差上げます。ブラウンの遺族の方に喜んでいただいで下さい」と、はづして下さいました。工事中のもの、米軍の使役に使ったものが、土産にもらい酋長に献上したものでした。本会にしてみれば、戦後のブラウンの写真はこれが只一枚
 ウトロックという環礁は、戦争中の麗わしい話が多く、感傷的になつていたとき、重ねての嬉しさをお察しいただきたくて認めました。

▽ブラウン島の霊砂

一昨年派遣員がクエゼリン島に寄港したとき、現在ブラウン島には、ミサイル実験関係者以外はここ(クエゼリン)と同じに誰も立寄ることはできないと聞かされた。そこでヒレリー司令官に霊砂を希望する理由を説明した結果、受領できたことは環礁七号でお知らせした。多数の御希望があったのでそれぞれお送りした。記事を見おとされ方もあろうと思う。本部にはまだ相当多量保管してあるので御希望の方には従来どおり無料でお送りしますから、御遠慮なく御申越し下さい。



玉碎された二戦友を想う

海軍兵学校第六十二期

本 名 進

我が忠勇なるクェゼリン島守備隊が、圧倒的な敵の大軍を迎撃、悪戦苦闘遂に玉碎して早や二十五年の歳月が経過し、本日その命日である二月六日を迎えることになりました。

この玉碎部隊の中に、我々海兵六二期の同期の級友二名即ち、音羽正彦侯爵と西原健郎君がおられるのであります。

想えば今より三十八年前、東亜の風雲急を告げる昭和六年四月、我等百三十名は、皇国防衛のため生涯を国家に捧げんと決意も堅く江田島海軍兵学校へ入校したのであります。

我々が最も光榮に思ったのは、伏見宮博英王殿下と朝香宮正彦王殿下を級友として、戴くことが出来たということでありました。我々は殿下のクラスとしての自覚と、学年指導官大石堅志郎少佐の『小訓を信条とし、大我に生きよ』との教訓を信条として、日夜厳しい訓練に従事したのであります。

当時兵学校の生徒隊監事は、昭和二十年四月沖繩への特攻に出撃した戦艦大和艦上にて、壮烈な戦死をされた伊藤整一大将(当時中佐)であります。生徒訓練のモットーは「アトモスト」即ち倒れ

る一歩前までの訓練であったのであります。

朝香宮殿下は金枝玉葉の御身でありながら、我々平民と何ら区別なく、この猛訓練に従事されたばかりでなく、その識見は勿論体力並に精神力は実に他の生徒の模範であつたのであります。

期香宮正彦王殿下は海兵卒業後臣下に降下され、音羽正彦侯爵となられました。

環礁創刊号の音羽参謀の御末期の記事中に、音羽参謀が敵戦車の近距離射撃により左胸部に負傷され、鮮血にまみれても軍医長の手を辞退され、或は戦況愈々不利となり、総員自決の時と見た某が『先任参謀もう駄目です』と叫び声を出したとき『馬鹿なことを言うな、たとえ我等は死んでもここを守らなければならぬのだ』と大声で怒鳴られたこと、或は、自決に際し音羽参謀が『陛下に御挨拶いたしましたししょう』と力強い声もはつきりといわれたこともありながらも平常の言行よりいさめたりなく感ぜられるのであります。音羽侯爵に關しては他の級友が投稿する予定なので私は西原健郎君について、些か想出を記すことにします。

西原君は極めて温厚な人で、口

数の少い人であつたが、沈着冷静然も熱烈な尽忠報告の至誠に燃える人でありました。尚西原君の兄様は、海兵在学中殉職され西原君と共に兄弟二人その一身を国家に捧げているのであります。私は昭和十七年十二月一日より昭和十八年五月十五日迄、戦時中ではありましたが、横須賀の海軍砲術学校高等科学生として、西原君と共に勉強にいそしんだのであります。

さて同校を卒業し、卒業生一同夫々第一線に赴任することになった時、或る卒業生の一人が、赴任先が地味な処で気に入らないと言つてているの聞き、同君は非常ににがにがしく思はれ、私に『何と不心得なことを言う者か、与えられた任務に唯全力を尽せばよいのだ』と言はれ、黙々として孤島の守備に向はれたのであります。

音羽侯爵及び西原君が他の守備隊員と共に、孤立無縁、絶対絶命の孤島の守備を命ぜられるや欣然として赴任、圧倒的に優勢な敵の猛攻を受けながら一言の不平等なく又微塵も憶するところなく、善戦敢闘、死すとも止まじの愛国心をもつて、故国の万歳を信じ、玉碎されたものであつて、生き残つた我々は当然その精神を継承し祖国の再建を圖らなければならぬ

これが生き残つた者の絶対的使命であります。名利のためでなく、真に無我無私進んで国家のために身を捧げることが最も尊いことでありました。

聖書に『人その友のため命を捨つる。これより大なる愛はなし』とあります。これが、国民として、その祖国のために命を捧げる、これより大なる愛国心はありませぬ。

近時国民の一部に玉碎の意義を軽視する風潮があるけれども誠に遺憾なことでありました。

クェゼリン島守備隊は祖国存亡の秋に当り、絶海の孤島に於て、祖国へ来襲する敵を阻止して孤軍奮闘力尽くして全員玉碎し、その骨肉を環礁にさらしたものであります。その崇高なる行為は国民の模範であり、全日本国民及びその子孫をして感懐興起せしめるものであつて、守備隊の攻績極めて顯著

加藤普佐次郎副会長は昨年九月十五日御昇天、村上義一副会長は本年の定期総会において、林会長の後を承け、会長に選任された為副会長が欠員となつておりました。このため村上新会長は会則の示すところによつて三月一日附帯幹事浮田信家氏を新たに副会長に指名されました。

副会長就任にあつては、二月の定期総会の頃から、欠員となつた副会長の指名について、村上会長から御諮問があり

であると言はなければなりません。命日に當り、守備隊員一同の英霊に對し、謹しんで心からの感謝と敬意を捧げると共に、その御冥福を御祈り致します。

〇二月六日の行事

沖繩遺族会は毎年春、秋の靖国神社例大祭に百余名参加し、参拝後三、四泊して観光して帰ります。本会の行事は本年迄は、慰霊祭だけで解散していましたが、多くの方から、一泊して観光を計画したらどうかと進言があります。これについて御意見や御希望のある方は八月十五日までにお知らせ下さい。御希望多ければ早速計画し、環礁十一号でお知らせし、参加の方の募集をいたします。

浮田常任幹事 本会副会長に指名さる

加藤普佐次郎副会長は昨年九月十五日御昇天、村上義一副会長は本年の定期総会において、林会長の後を承け、会長に選任された為副会長が欠員となつておりました。このため村上新会長は会則の示すところによつて三月一日附帯幹事浮田信家氏を新たに副会長に指名されました。

副会長就任にあつては、二月の定期総会の頃から、欠員となつた副会長の指名について、村上会長から御諮問があり

浮田 信家
副会長就任にあつては、二月の定期総会の頃から、欠員となつた副会長の指名について、村上会長から御諮問があり

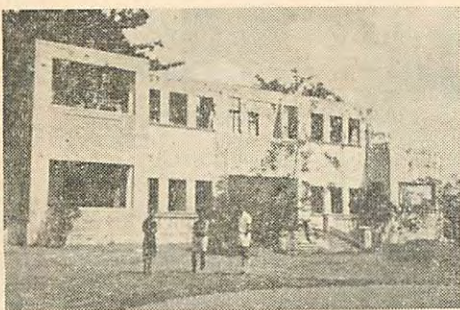
浮田 信家
副会長就任にあつては、二月の定期総会の頃から、欠員となつた副会長の指名について、村上会長から御諮問があり

オーシャン島

幹事 佐竹 エス

昭和四十二年七月二十四日午後四時、ラリッククラタック号の船上から、マキン島慰霊碑に最後のお訣れをし、御冥福をお祈りし次の慰霊地、オーシャン島に向いました。真紅の夕焼を眺め乍ら広大な空を何一つささぎるものもなく西の夕焼がやがて東に南に北に空一杯に拡がり紅から橙、ピンク、藤色と変りやがて薄暗くなります。船は又大揺れに揺れ始め打ち上げられた海水が船の両舷でザブザブと前後に流れ始めました。満月に近い月、涼しい潮風はすっかり日中の汗をぬぐい去って呉れます。明日はいよいよ赤道を通過し南半球に入ります。

今夜は赤道祭らしく、スチール



オーシャン島司令部跡

(右より)ラスタ秘書、山田徳子氏、筆者

ギタに合せコーラスやらダンスが夜中までつづいていました。

日本を出る前、南洋通の人からオーシャン島やナウル島へ女性が渡航するのは無理である。暑いので船員は裸で運転するのだが、女性か一人でもいると裸もならず迷惑をかける。客船のような設備は何もないと聞かされていたので、覚悟はできていたが、やはり相当こたえました。二十五日は朝から船室にもぐりこんだまま、食欲もなく、何をすることも困難です。午後四時二〇分、日本時間一時二十分、赤道通過との船内放送で、頭をもち上げ空を眺め、海を見ました。何の変りもない、青い海だけでした。甲板に出て見ようと思いましたが、足がもつれ自由にならず、そのまま寝てしまいました。二十六日午前二時オーシャン島のあたりが見え出しました。急に元気がでて今までの船酔が嘘のようでした。小高い丘も見えて、マシナルとは大部ちがいます。島の

中程にキラキラ光って見えたのは大きな丸いタンクでした。礮磁石積出埠頭には大きなオーストラリアの運搬船が横着中。海際から離段のようにブロック造、二階建のアパートが並んでいます。乗用車やトラックの往来するのを見えて来ました。南海のオワンズオーシャン島。慰霊訪問最南端で南緯五度、船上からの全景をカメラにおさめ、暫くぶりに朝食もおいし

く頂きました。

検疫は八時におわり検疫官のボートで上陸することになりました。港には上陸岸壁もあると聞いて早速服装も浮田さんは白のホンコンシャツ、黒ドスキンのズボン、私も黒レースのスーツに黒靴、これは私等慰霊祭のときの服装です。浮田さんの白シャツは一ダース持参慰霊祭毎に新品を着られました。山田さん(現在徳原夫人)が通訳をして下さいました。役人と共に棧橋から、さしまわりの車で、政庁に着きました。村役場という感じで郵便局も同居です。日本まで封書三十五セント(日本貨一六〇円)と聞き十セント以下の安い切手を一枚づつ三十五セントだけ買いました。綺麗な珍らしい切手ばかりでした。南半球からの音信を飛行機に託し会に送りましょう。

間もなく、長官が見えられ、私達の来島目的に協力しますと云われ慰霊碑の建立、戦跡訪問のため車を出さう。秘書官に命ぜられました。秘書はオーストラリアの青年でした。乗用車に慰霊祭用品等を積み込み出発しました。慰霊碑は島の東側、広漠たる南太平洋を眼下に見下す絶景のところで先生。そこには、明治四十一年松岡の碑と認められた記念碑がありました。その側に内地から持参の碑を建て、オーシャン島戦死者の霊を慰めました。海からの風がよく、ローソクはすぐ消えます。致し方なく、線香だけのお許をいただき焼香しました。お供物は内地から用意したものを、他の島同様捧げました。長官の指令で、この土地の地主も、大酋長もついて

まいりましたが、秘書はじめ、全員懇ろな焼香をして下さいました。下の浜辺で雲砂を集めました。その後遺骨採集、戦跡訪問のため島を廻ることにしました。島中礮石採掘のため遺骨のさらされているところ武器の残りなどありません。海岸線の防空壕跡もなく戦争を偲ぶ、爪跡は何もありません。島の北端にコンクリート建の廃屋があり、銃弾や爆弾による無数の弾痕が残り、ここだけが激戦の様相を語り、それを日本軍が司令官として使っていた建物と聞きました。礮磁石採掘所や積出し所等も見せて頂き十二時近く礮磁石会社に案内されました。日本からの土産はこの事務所で、贈呈しました。日本からの品物ははじめてとあって大変喜ばれました。

会社の内外を見させて頂き、ペランダでの記念撮影も行いました。日本からのお土産品の中から男子、二人のため、浅間台小学校児童の絵と絵本を差上げました。やがて見晴しよい大邸宅に招かれました。丁度浦島太郎のようです。広い庭園にきれいな花が咲き、白い鳥や赤や青、緑色の小鳥が飛びまわります。いろいろな所を云うのでしよう夜会も出来るようにと木から木へ赤や青の電球も釣るされています。広い応接間に案内されまいたが、お土産のフロッキもとてもきれいと満足でした。子供さん二人も日本の絵や本を始めてで誰もしや友達に見せてあげると喜んでくださいました。

食堂での昼食、銀の食器にレールスのナフキン黒人ボーイ二名がつききりでのサービスです。慰霊訪問がこんな風に頂く等夢にも思われません。二階のバルコニーに望影鏡があり港や船員が働いているのもよく見えますがこれは日本製で戦利品です。杉鏡 匡の名がついていました。出港までの時間、奥さんの運転で案内してくださいました。山腹に日本人の墓地があるというので、行って見ました。中国人墓地でした。島民の墓に、この第二次世界大戦の戦死者の墓が綺麗に建てられてありました。心をこめその御冥福を祈りました。

高級社員のクラブ、スポーツ場ブルは豪華な近代色のものでした。水のないためブルの水はオーストラリアから船で運ばれたものと聞きました。

オーシャン、辛党の人はすぐウイスキーと感ずるかもしれませんが、私には竜宮のように思われませんでした。午後二時半、お土産の玉手箱に、サメの歯で作った薔薇の民芸品や、果物の王様といわれるマシナルを頂戴してボートに乗り、大勢の島民の見送りをうけ帰船の途につきました。

松岡先生の碑、今日建てた慰霊碑に御冥福を祈りながら、この島にも日本文字の碑が二つになった何時の日これを読みとれる人が訪れるであろうかと思いつつ、上り上り時鐘をあげました。私は上甲板に上って島影が見えなくなるまで立ちつくしました。

本年二月六日の慰霊祭と

定期総会の経過報告皇居参拝記事

今年も前日から九段会館に泊られた方が五五名。本部役員有志がお世話にありました。本年も現地で撮った八ミリ映画やスライドによって、現地派遣員の報告を行いました。

今年二十五年度の年、現地建碑完了の直後、皇居参拝等の計画もあり参加申込も多数でした。この日は例年のとおり、定期総会も開催いたしますので、一日の行事としては、無理の多いスケジュールです。

例年のことながら、神社の扉の開くのを待ち兼ねて参拝された方もあって御約束の十時半には、北は北海道、南は鹿児島県まで全国から三百五十人の参列者がそろいました。今年も現地慰霊碑写真の頒布もあって受付も大変でしたが参集所の日なたに三三五五お集りになって微笑ましい車座がなごやかでした。

定刻十一時一同着席、修殿の後村上副会長の二十五年祭の祭文の奉読が行われました。既に二十五年、先年想い出も新たな二十年祭からしても五年歳月の流れの早さを嘆んじつつ親殿に昇殿し、心からそれぞれ肉親の冥福を祈り、廻廊に降って御神酒を受け退下したのが正午少し前でした。後の行事の都合もあつたので、そのまゝ神社の参集所を借用して

定期総会を開きました。恒例によつて経過報告と会計報告四十四年度事業計画の説明を行いました。全員異議なく決定されました。その他議事としては
一、林会長の退任
二、村上義一副会長を新会長に選任
三、昼間常任幹事を監事に選任のことが提案、説明されましたがこれも全員の御賛成を得て可決されました。
昼食後皇居参拝者二百八十名は四台のバスに分乗、皇居着、桔梗門から参入、係員から一般説明を聞いて後、約一時間余に亘つて皇居の拝観をいたしました。特に新宮殿は完成直後のこととして一同深い印象をとどめ、感激して再び桔梗門からバスにもどりましました。

慰霊碑建設工程報告

常任幹事 浮田信家

昨年十月二十九日慰霊碑の包装木箱が四個クエゼリン埠頭に、完全な形で到着、その場でミラー司令官が受領されてから、十一月十九日建立作業の終了までのことは前号環礁徳原徳子さんの記事で詳細報告致しました。その後十二月五日徳原さんから

十一月二十九日(金) 小石を敷きすつかり終了。十二月一日に除幕式をする予定。除幕は牧師、

レブ、ブックさんをお願いすることに致しました。入口の鳥居「日本人墓地」のサインなど新しくペンキが塗られ、綺麗に化粧されていきました。十二月一日(日) 午後焼けつくような暑さの中で除幕式開催。レブ、ブック牧師のお祈りではじまり、三十分余で無事終了。碑の前にテーブルを置き、真新しいテーブルカバーをかけ、お送り下さったお供物を並べ、線香をたき一人一人焼香を致しました。日系米人多数。その他軍の幹部夫妻が何組も焼香しました。大変静かな、心のこもつた、そして何となくなごやかな記念すべき除幕式でした。生憎くミラー司令官は前日本国からの命によつて急に出張され不在でした。司令官以下軍をあげての厚意と日系米人達の献身的な協力で、初めからスムーズに進歩しましたことは大変幸運だったと思います。式終了後お酒や冷えたビール、コーラを開け、お供物を領けあつて、しばらく談笑。午後五時すぎ解散しました。イナフクさんがわざわざホテルから航空便で生花を取り寄せ、供えて下さいましたが、美しく英霊をお慰めするかの様に赤く映えておりました。徳原さんからの報告はこれで終つております。

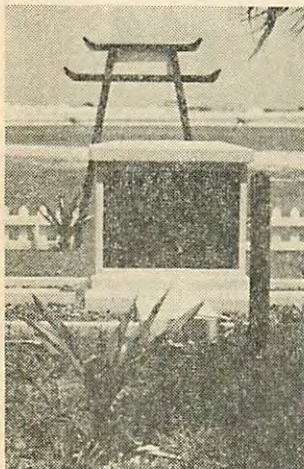
会員のすべてが力を合わせた結果は、政府さえ為し得な



つた大きな仕事を遂にやつてのけたという、英霊に對しせめてものお慰めができたと思つて、御同慶の至りと思つています。

○アルバム編集と 図案の募集

定期総会の際の御提案もあつて、現地建碑完了の機会に本会のアルバムを作製することを考えています。二十年祭からはじまり、



徳原夫妻に對する 感謝の集いのお知らせ
 現地派遣員出発前から始まり今後共本会が大変お世話になる徳原さん御夫妻が、今回休暇で七月十五日東京着来日、八月六日羽田発でクエゼリンに帰られます。
 この機会に、左の予定で、感謝の集いを開催し、あわせて同島の近況など承りたいと存じます。
 と き 七月二十九日(火)夕刻
 ところ 東郷神社内水交會
 會 費 一名 一、〇〇〇円
 決定の上御案内状お送りいたしますので、参加御希望の方は七月二十日までにお申込下さい
 会自体の写真、戦前、戦中の写真は相当多数あります。
 編輯、装幀、特に表紙図案等本会にふさわしいものの御着想等お聞かせ下さいませようお願いいたします(締切八月三十一日)
靖国神社 御創立百年奉祝大祭
 本年靖国神社が御創立百年になりますので、これを記念して諸種の記念事業が計画されました。この祭を環礁八号で皆様にお届けしましたところ六月二十六日現在、寄附者三四八名、寄附額六十二万九千三百円、本会会員から奉納された由でございます。遺族だけの集りではないようです。会員の皆様はこのようなお気持ちを心から感激いたしております。

第五期決算報告と昭和44年度予算

マーシャル方面遺族会

昭和44年度予算

1 収 入	
43年度より繰越	499,154
会費(500円×1,500人)	750,000
寄附金	750,000
受取利息	5,000
収 入 計	2,004,154
2 支 出	
現地慰霊碑建設費	640,000
事務用品費	40,000
印刷費	100,000
刊行費	300,000
会議費	15,000
通信費	600,000
通定慰霊祭費	100,000
期務所借料	50,000
振替払込費	120,000
雑費	30,000
支 出 計	2,004,154

第5期決算報告書 (自43.1.1 至43.12.31)

1 収 入	
前期より繰越金	676,242
会費	273,224
会費預り分(44,45,56年)	33,000
寄附金	1,523,449
受取利息	15,283
雑収入	49,407
収 入 計	2,570,605
2 支 出	
現地慰霊碑建設費	856,825
事務用品費	40,359
印刷費	90,254
刊行費	304,258
会議費	5,400
通信費	513,102
通定慰霊祭費	92,003
期務所借料	51,800
振替払込費	14,040
雑費	93,805
支 出 計	1,290
3 後期繰越金	499,154
内訳	
現貯金	9,408
振替貯金	22,004
普通預金(富士・世田谷)	25,621
通知預金	442,121

建 碑 に 当 り

隠れた功労者への感謝

本会は創立このかた、麗はしい話題が次々に生れ、有難く思います。篤志会員松平永芳氏は本誌第四号に「美中の美」との巻頭の辞を寄せられました。

今日また新たに一つの佳話を御

紹介致したいと思えます。それは昨秋慰霊碑を船積のとき、これがクエゼリンに着いて、荷卸し、運搬、基礎工事、組立建設工事これに要する材料費、人件費等米国領内の事なので見当がつかない。現地派遣員の調査によつて見積ると、少ない額でなく、役員一同頭痛の種でした。

それが幸せにも、ヒーレイ司令官、後任のミラー司令官、ヒーレイ

紹介致したいと思えます。それは昨秋慰霊碑を船積のとき、これがクエゼリンに着いて、荷卸し、運搬、基礎工事、組立建設工事これに要する材料費、人件費等米国領内の事なので見当がつかない。現地派遣員の調査によつて見積ると、少ない額でなく、役員一同頭痛の種でした。

それが幸せにも、ヒーレイ司令官、後任のミラー司令官、ヒーレイ

イ司令官時代のオグデン陸軍中佐などの真の理解と心からの協力の外に徳原さん夫妻の蔭の力を特筆しなければなりません。

本会から司令官に送った仕様書はすべてを徳原氏に手交され、この通り建設すること、必要な機械器具、材料は適宜警備隊の物資を利用してよいが、作業は勤務時間外有志の者で行うよう指命されました。

徳原さんはクエゼリンの日系米人に呼びかけましたところ、ブルーイ、ルロック、タイマス、ロッド、リガス、オノ、カワハラ、オカイド、コジマ、フクダ、イナフク、カカズ、ミヤシロ、ナカシマ、アワクニ、ニイ外島民など二十四、五人が話しに協力力を申し出て下さいました。徳原さんの手紙に「一日の作業終了直後から、疲れた顔も見せずトラックやクレイン車を運搬し墓地へ直行、西陽をまともにうけて暗くなるまで滝のような汗を流していました。三万五千の霊

を慰めるために、生きた人達の流した汗が墓地の隅々にまでしみこんでいることを忘れないうで頂きたいと思えます。それがその人達に對する最大の報酬だと思つています」と。会は司令官はじめ一人一人に御札の品を贈ると同時に感謝の手紙を贈りました。

会のつづく限りこれらの方々の奉仕に感謝の意を表すると同時にこれらの方によつて清らかに保たれるようお願いしたいと思います。

寄 附 者 芳 名

(三八三名)

今回も数多の篤志会員その他や会員各位から左のとおり多額の御寄附をいただきました。この外に昭和四十三年定期総会で決定された年度会費をいただいて居ります。現地建碑のため全国都道府県からいただきました助成金につきましては建碑関係収支決算完了の上報告させていただきますと存じます。御協力を深く感謝いたしますと同時に本会の念願である慰霊に事欠かさぬよう一層の努力を続けたいと存じます。

(昭和四三、一二、一から四四、五、三一までに入金した分)

- 寄附額 芳名 (敬称略)
- 一七〇〇〇〇 篤志会員その他
 - 一〇〇〇〇 厚生省援護局 業
 - 三〇〇〇 東京共同募金
 - 二〇〇〇 海兵六二期級友
 - 一〇〇〇 会 東郷神社
 - 一〇〇〇 会 井上義雄
 - 一〇〇〇 会 高田源次郎
 - 一〇〇〇 会 林幸市
 - 一〇〇〇 会 船本正二郎
 - 一〇〇〇 会 松平永芳
 - 一〇〇〇 会 柴山積善
 - 一〇〇〇 会 吉野信一
 - 一〇〇〇 会 日本郷友連盟
 - 一〇〇〇 会 染谷茂太郎
 - 一〇〇〇 会 珊瑚
 - 一〇〇〇 会 三角芳貞

事務局だより

○現地建立の慰霊碑の写真御希望の方に

慰霊碑がクエゼリン島に着いてから、完成して除幕式の終るまでの写真は、七十枚近く、いろいろなものがあります。この中から全景と正面と裏面の三枚を選びますと、本号の表紙の全景、十二頁の正面のもの、同じく裏面のものでよいように受領します。何れも六月四日に徳原様から受領したものであります。少しでも早くお手元にお届けしたくて、今日までいろいろお送りしたのですが、今後はこの三枚をお送りしたいと思います。多少値段も高くなり、申しわけありませんが、較べてみますと、今日現在コダックで焼くのが、一番きれいです。少し面倒でも組まないで、全景を何枚、表を何枚というようにした方がよいように思います。御入用の方は、別項の焼増料金御覧の上、別紙注文書に、お名前、御住所、枚数御記入、料金と共に送り下さい。

○写真の焼増料金について

このことについては、前号の事務局だよりに掲載しました。その中カラーについては、クエゼリンから来るネガが、コダックの正形(所謂六六)のもので、多少高くなりキャビネは三五〇円に、サービスマネージは八十円にしないと赤字になります。従って今後はカラーですとキャビネ三五〇円、Lサイズ一〇〇円、

サービスマネージ八〇円、白黒ですとキャビネ五〇円、サービスマネージと御了解下さいますよう、お願いいたします。

○会費送金のお願い

昨昭和四十三年から本会が会費制となったことは、既に大半の会員が御承知になり、会費も逐次お送り下さっています。しかし本誌の活字が小さく、字が細かいため、見おとしておいくの方もあり、四十三年度会費未納の方も相当あります。

会計報告でもお察しいただけるように、このままで行きますと、本会の将来が案ぜられます。今回は、ピンクの折込み紙片によってお一人お一人の御送金状況をお知らせいたしました。万一その記載事項に誤りがありましたら早急にお知らせ下さいませようお願いします。

臨時費を必要とする事業も本年でおわりますので、明年から予算どおりの健全な運営が可能になります。従って次の年の会費は前年十二月末までにお納め下さいませようお願いします。このため四十三、四十四年度の会費完納の方にも振替用紙同封いたしましたので適宜御使用下さいませよう申添えます。

○よく似た慰霊碑

六月上旬の某紙に「硫黄島摺針山に顕彰碑」という見出しで次の記事がのっていました。昨年完成した本会の慰霊碑によく似ているようです。しかし本会のもは既に昭和四十一年その企画が完了し米本国の了解も終ったもので、そ

の頃は、まだこのような構想はどこにもありませんでした。在来の自然石やコンクリート造りより、こうした全国の心のこもった慰霊碑が続いて建てられてゆくことは嬉しいことだと思えます。

『沖繩返還より一足先に小笠原が帰ったこの二十六年で一年。二十五日には激戦の硫黄島摺針山の頂上に戦死者顕彰碑がアメリカの碑とともにたち、二十七日朝、除幕式が行なわれる。これは硫黄島顕彰碑建立期成会(会長岸信介氏)が準備を進めてきたもので、同期成会の大浜信泉副会長は、十一日朝千葉県下総自衛隊基地から現地へ向い地鎮祭を行なった。この碑は各県の名石を集め同じ大きさの四角形のものに県名を刻みつけ、日本列島を形づけるようになっており、十日出発した遺骨収集団の船で送り現地で組み立てることになっている。各県の遺族代表一人は二十七日羽田からYS11三機に分乗、除幕式に参列する。

靖国神社みたま祭に

本会の大型献灯奉納

今年もまた七月十三日から十七日まで靖国神社頭に灯明を捧げ英霊をお慰めすることとなりました。例年通り本会名をもって大型献灯をいたします。期間中御灯明のあがりませうことを御報告しませう。

◎本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香 鳩彦	監事	昼間 兼干
顧問	石橋 湛山	篤志会員	有馬 成甫
相談役	朝香 孚彦	篤志会員	板垣 徹
会長	村上 義一	篤志会員	大野 克一
副会長	浮田 信家	篤志会員	嘉村 栄
常任幹事	佐藤 宗丕	篤志会員	瀬沼 光久
常任幹事	橋口 昭利	篤志会員	土屋 太郎
幹事	秋山 正清	篤志会員	中島 昌彦
幹事	井上 賀雄	篤志会員	中田 虎一
幹事	宇田川 ヒサ	篤志会員	成田喜代治
幹事	木村 久子	篤志会員	長谷川栄次
幹事	国松 ふ江	篤志会員	長谷川 敏
幹事	小泉 エ江	篤志会員	林 幸芳
幹事	佐竹 エス	篤志会員	松平 永芳
幹事	萩原金次郎	篤志会員	村岡 達志
幹事	山浦 信子	篤志会員	安藤 小夜
幹事	岡野 正文	篤志会員	白鳥 梯子
監事	末広 正男	篤志会員	本木 光江

○東京都在住御遺族の方に

今年も八月十五日武道館で全国戦死者追悼式が行われます。本会にも御案内をいただいておりますが、参列御希望の方は至急戦死者氏名、参列者名、戦死者との続柄を本部宛御通知下さい。

○編集を了えて

ブラウン島のごとは三十九年頃から、ずっと気になっていました。直接手紙も出し、マーシャル諸島巡訪中もずっと気をつけました。が、なかなか集らなかつたので、市ヶ谷の戦史室におすがりして戦史叢書、その他の資料を利用していただきました。それに若干の本部の蒐集資料や遺書や遺族通信によって本号はブラウンの特集号とし、編者もやっと少し肩が軽くなりました。長岡市の新保正之様

から御次男様を偲ぶあまり大変御苦労なされて御通知をいただきましたが、ブラウン環礁中エンチヤビ島かメリレン島か、本部でもまだわかりません。しかし戦史叢書によって、詳しく教えていただき、特集号のできましたことを、末筆ではありますが、読者に御報告し、改めて戦史室に厚く御礼申し上げます。

本部

郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話(東京)三三三六四番